

『見よ、この人だ』 (ヨハネの福音書 19章 1-16節) 2023.3.5.

<はじめに> イエスへの訴えを巡って、ユダヤ人たちとローマ総督ピラトが激しくぶつかっています。そこに渦巻くのはそれぞれの思惑です。イエスはその渦中で翻弄されているだけなのでしょう。神様はこの状況をただ静観されているだけなのでしょう。

I 十字架を叫ぶユダヤ人

① 律法の正義に駆られて

当初、イエスの罪状も告げずに訴え出た(18:30)ユダヤ指導者たちは、自分を神の子としたことが律法では死に値すると明言します(7)。彼らの正義心はイエスへの憎しみと妬みとなって、そのいのちを葬り去るまで収まることを知りません。

② 十字架を連呼する(6,15)

自分たちに死刑の権限がない(18:31)ことを逆手にとって、彼らはローマの手でイエスを処罰するよう迫ります。十字架刑はローマ式の極刑です。ローマがイエスを十字架につけることで、自分たちの手は汚れずに目的は達することができるのです。

③ 正義に潜む心理

イエスを告発した彼らには、律法の前に正義を貫き、冒涇者を糾弾した者としての自負がみなぎっています。しかし、聖書の神は各人の心を探られる御方です(Iサムエル 16:7、エレミヤ 17:10)。イエスは律法を内面へと深化するよう語られています(マタイ 5:21-25)。

II イエスを引き渡すピラト

① 努力も水泡に

ピラトは、イエスに何の罪も見出せない、と言い続けています(18:38,19:4,6)。イエスを釈放しようと努力した(12)ものの、最終的にはイエスを十字架刑に引き渡します(16)。なぜ彼は権威をもってイエスを釈放できなかったのでしょうか。

② ピラトの行動

ピラトはイエスがガリラヤ出身と聞いて、国主ヘロデに送ります(ルカ 23:7)。バラバを引き合いに取引に打って出ます(18:39)。鞭打ち、茨の冠・紫の衣を着せて辱めて満足させようとします(1,2,5)。最後、身柄を引き渡す際、人々の前で手を洗います(マタイ 27:24)。

③ ピラトの心理

彼の本心は、この件に関わりたくない、の一心です。しかし、人々を恐れ(8)、自分の立場を守ろうとするあまり(12)、どう処すべきか分かっていて、その権威を持ちながらも、それを貫くことができませんでした。結果、彼はイエスを十字架に引き渡してしまったのです。

III 十字架に向かうイエス

① 極悪人の身代わり

強盗バラバ(18:40)は当代一の極悪人です。イエスはその身代わりとして十字架へと追いやられました。私たちは、罪人とはどんな人を思い浮かべましょう。「あなたのここは間違っている」と指摘を受けるとき、どんな反応と対応が考えられますか。

② 正しい人の身代わり

イエスは「私は悪くない」と自称する人たちによって十字架につけられました。その主張する人たちは正しい人でしょうか。罪は表面的な行為だけでなく、ズルい思いと生き方も表れます。聖書の光はそれを示し、救い主が待っていることを示します(黙示 3:19-20)。

③ 見よ、この人だ(5)

連れ出されたイエスの姿を見て、神の子、王と称する者を兵士も群衆も嘲り、蔑みます。しかし、ここに神のみこころが隠されていました(イザヤ 53:4-6、8-10)。この十字架への描写の中に自分を見出し、「私が悪かった」と悔い改める者を神は赦されます(Iヨハネ 1:9)。

<おわりに> 罪を隠し、押し付け合う者の狭間でイエスは十字架へと送り出されました。明らかな罪も正しさを装った隠れた罪も、神の目は見逃されません。それを神の御前に自ら明らかにする者を、神は救い出し、罪を赦し、神の前に義しい者と認めてくださいます。(H.M.)